

令和7年6月能登半島輪島市門前町における「市民祭り」の来訪者アンケート

団体名●能登復興調査団／代表者名●バイヤー アヒム（人文学部国際文化学科・教授）

はじめに(背景・目的・目標)

令和7年6月8日、能登地方の門前町で輪島市民祭りが開催された。門前町は、曹洞宗の重要な寺院である総持寺の門前に位置する町で、寺院への参拝者は地域経済や文化生活の重要な一部を担ってきた。令和6年元日に発生した能登半島地震では、門前町と総持寺が震度7の揺れに見舞われた。寺院や、寺院へ続く商店街の多くの建物が倒壊し、しばらくの間、総持寺への参拝も一時中断された。地震から1年半が経ち、総持寺も一部再開されたことで、今回の市民祭りは「総持寺通り商店街」の活性化にとって良い機会となった。さらにこの日は、普段は金沢市で出店している屋台の団体「よこっちょ・ラボ」も祭りに参加し、祭りの多様性と賑わいを高めるために屋台を出店した。

活動内容

祭りの来場者の人口統計的特徴、背景、感想、そして希望をよりよく理解するために、3人のボランティア学生と引率教員(バイヤー)が、祭り当日に門前町を訪れた。輪島市役所の事前承認を得て、ボランティア学生たちは11時から13時頃、総持寺通りでアンケート調査を実施した。この時間帯、通り沿いのすべての屋台や店舗は営業しており、総持寺の入口向かいにある輪島市役所門前総合支所前の広場では各種の演奏が行われていた。地元団体による演奏の一部が行われていた段階だったが、すでに一部の演目が終了していたため、若い親子連れはすでに帰宅しており、アンケート回答者の平均年齢層は40代となっていた。総持寺通りの下手には、禅の里(ぜんのさと)広場という文化センター兼観光案内所があり、その建物の外ではプロやセミプロのアーティストによる音楽パフォーマンスが行われており、その時間帯は主に大人向けの内容だった。

成果、結果の考察

市民祭りの参加者には、子どもの発表を見に来た保護者や、ボランティア活動に関わる人々など、多様な参加者層が見られた。また、サイクリストの旅行者も一定数おり、門前町の自然の美しさが複数の回答者から高く評価されていた。来場者からは、飲食屋台やパレードに対する楽しみや要望の声が多く寄せられていた。若い世代からは、SNSで発信できるようなスポットへの関心が示されていた。40代・50代を中心に、地域の活性化や観光客の増加、イベントの規模拡大を期待する声が目立っていた。

門前町の魅力としては、幅広い年代の回答者が「人の優しさ」「自然の豊かさ」「落ち着いた雰囲気」などを挙げており、特に人柄や地域のつながりを評価する声が多く見受けられた。

今後の課題、展望

10代から90代までの幅広い年齢層がアンケートに回答しており、若い世代は地域の人々との交流や自然に魅力を感じている一方、年配の世代は昔ながらの街並みや祭り、静けさに価値を見出していることが分かる。全体として、門前町は世代を超えて「人と自然の温かさ」が強く支持されている地域であることが明らかになった。調査結果の詳細は『金沢星稜大学人文学研究』第10巻に掲載される予定だ。



門前町でアンケート実行中